

講 演

(本紀要所載論文は凡て署名者の責任にして本會の意見を代表するものに非ず)

山鹿素行先生に就いて

東京帝大教授
文學博士

深 作 安 文

山鹿素行先生の記念講演をなすに當つて第一に想出されるのは赤穂義士の快擧である。世間周知の如く元祿時代は徳川幕府三百年の治世中、人心の最も糜爛した時で、所謂る旗本八萬騎の子弟たちは殆ど擧つて遊治郎と化して了つた。斯様な時代に於て、四十七人の純忠の士が一年餘の慘苦を嘗めて遂に仇敵吉良の首級を擧げ、泉下にある故君の宿怨を霽らした義烈の行動は、確に當時の弛緩せる人心を緊張せしめ、人をして日本武士道の眞味を味はせたものである。此の如き壯擧が、果して外國の史乘に在るかどうかは寡聞な私の承知せぬ所であるが、日本の歴史に於ても空前の事實である。そこで、斯ういふ

山鹿素行先生に就いて (深作)

著しい社會的事實が何に由つて起つたか、それには何等かの根源が無ければならぬと云ふ事が考へられて来る。

次には吉田松陰の事に想到する。松陰は幕末に出た志士中の志士とも云ふべき人物で、當時我國を襲うた内憂外患の矢面に立つて皇國の國難を排除するには、何よりも先づ皇室と人民との間に介在する幕府を倒さねばならぬといふ見地に立つて、東奔西走、席暖るに遑あらず、京都にあつて陪臣の身を以て畏くも皇室を監視し奉るが如き不忠不義を敢てしつゝある所司代間部詮勝を其の血祭に供せんとして、不幸、幕吏のため捕へられ、遂に江戸に檻送せられて、傳馬町の獄屋で斬に處せられたのは、これ亦周知の事實である。是より先、松陰は郷里長州萩の松下村塾にあつて、青年子弟の教養に當つたが、その門下には多くの俊髦が輩出した中に、木戸孝允・久坂通武・高杉晋作・前原一誠・伊藤俊介・山縣狂介・品川彌二郎・山田顯義・野村靖・入江弘毅の十名は殊に傑出した人物であつて、若しも是等の人々が當時の日本に出なかつたならば、明治の大改新は或は別の方向を取つて進みはしなかつたかと思はれる。松陰が是等の人々を教養した時間は僅に二年半に過ぎないのに、斯かる短時間にどうして其れ程の偉大な教育的効果を擧げたのであらうか。勿論、松陰は稀有の天才的教育家であつたと思はれるが、而かも其の松陰を何者が其れ程までの大人物に仕立て上げたか、これにも何等かの力がなければならぬ。

第三には乃木大將御夫妻の自刃である。これも恐らく他の文化國には絶えてその例を見ない事實であらう。私は當時、東京帝國大學で世界史を講じてゐられた箕作元八博士にも伺つて見たが、博士も斯かる事實は世界史上にあるまいと言はれた。随つて外國人の大部分には、逆も大將御夫妻の心事が理解されない。曾て或る外國の教授は予の間に答へて、自分には深い事情は固よりわからないが、強ひて聽かれるならば、大將には先帝陛下に殉じ奉つるよりも、生存へてゐて新帝陛下に忠義を盡し奉つる方がより良くなかつたかと言つたが、これなどは先づ出來の好い答であつた。その後に至つて、米人ウオツシバーンなる者が『乃木』と云ふ書物を著した。此の人は曾て明治三十七八年戰役の時に、第三軍に従軍を許可され、親しく乃木將軍の馨咳に接した事があるので、深く其の人格に傾倒してゐたのであるが、これが外國人としては大將御夫妻の自刃の心情を最も好く理解したものである。日本人としては勿論誰一人として此の悲壯な事實に感激しない者はあるまいが、而かも此の事實の由つて來る所は果して何處にあるか。表面の觀察としては忠烈とか貞烈とか云ふ事が考へられるのであるが、更に一步踏込んで、其の忠義・貞節は何に原由するかと云ふ點に考へ到ると、やはり其處には如上の二事件と同様、別に深い處に異常の力が働いてゐるやうに思はれる。

我々が山鹿素行先生の數ある著書を讀んで、深く考へて見ると、以上に申し述べた三つの事件は、何

れも先生の抱懐された思想と深く關係する所があるやうに感ぜられる。以下少しくこの點について卑見を述べて見たい。

二

第一に赤穂義士と素行先生との關係が深い事は、今更詳述するまでもないであらう。先生は寛文年間に『聖教要録』を著して、當時の官學たる朱子學を批評されたが、その批評眼の鋭い事は痛快を極めてゐるので、眞理の前には何者をも恐れず、幕府の尊重する學問を縦横無盡に批評のメスにかけて、痛烈に論破したのである。この事が當局の忌諱に觸れ、遂に播州赤穂藩に流竄させられた。これは實に寛文六年先生四十五歳の時の事である。しかし先生と赤穂藩との關係は、此の時に始まつたのではなく、是より先、承應元年、先生三十一歳の時、赤穂の藩侯淺野長直（長矩の祖父）は、先生の名聲を聞いてこれを招聘し、師禮を盡して優待した。それで先生も亦、心血を注いで藩の教育や政治に參畫し、祿仕九年間に互つたが、而も藩主長直は之に何等の職務をも命ぜず、先生の所謂「浪人分」にして置いた。これは長直に深い考へがあつての事で、若し職を與へると、先生ほどの優れた人物が長直の臣下と云ふことになる。それでは相濟まぬと云ふのが長直の心事であつたのである。斯う云ふ次第で、寛文六年の流謫以後、先生の赤穂滞藩は十年間であつたが、前の祿仕九年を加へると實に十九年の長い間で、その間に先

生が赤穂藩の君臣に與へられた感化は實に大なるものがあつた。赤穂義士の主盟大石良雄は、先生流謫の時に漸く八歳であつたが、後ち赦に會うて延寶三年歸東された時には十七歳で、その間、直接に間接に先生から受けた感化が、此の忠臣を作り上げる上に與かつて力のあつた事が想像される。その他、義士中の老者たる吉田忠左衛門兼亮は報讐後、死を賜はつた時に六十三歳、小野寺十内秀和は六十一歳、堀部彌兵衛金丸は七十七歳、間喜兵衛光延は六十九歳、間瀬久太夫正明は六十三歳であつたから、素行先生流謫の寛文六年には、最年長者の堀部彌兵衛は漸く四十歳に達したばかりの男盛りであり、其の他の人々に至つては何れも三十歳前後であつた。是等の人々が先生の偉大なる人格から非常な影響感化を受けた事は申すまでもないことであらう。

赤穂四十七士の義擧と素行先生との關係は、以上の事實だけを見ても十分首肯の出来る事と思ふが、先生の名著たる『山鹿語類』の中には、報讐論が出てゐる。今その一節を抄出して見ると、次の如くである。

凡そ仇あるの所をしらば、速にその地に至り、身をひそかにし事をたばかつて、仇の居所を詳にし、仇の平生の體、其交友、其なす業、其往來の道、用心のいたし様を詳に索り、時分を考へて押入仇を報ずるか、又途中に待居て是をうつべき也。其用法を細にしらざれば、仇ありとさくに任せて、格物

薄きを以て致知たらず、或は仇を見ちがへ、或は仇を遁れしめて、一生の謀を一時に空しくすることあり、孝子の本意にあらず、よくねらひよく謀つて、其可_レ全討_二の術をつくし、而後無_二の鬭諍を可_レ決也(山鹿語類、父子道二、事父母の章)。

此の一篇と四十七士の態度とを比べ合はせて見ると、思半に過ぐるものがあらう。予は四十七士の壯舉を以て此の素行先生の報讐論を地で行つたものと考へ、先生の偉大なる人格の力、精神の力が、四十七士の行動を通して活きて働いたものであると考へたいのである。

三

吉田松陰についても略ぼ同様の觀察が下し得られる。

松陰は元來深く素行先生を尊崇した人で、その著書中には「山鹿先師」と記してゐる。『武教講録』は松陰の遺著として有名なものであるが、これは元來素行先生の『武教小學』を臺本として諸生に教へた筆記であつて、その冒頭には、「幼より山鹿先師の書を読んで今日に至る」と云ふ事が書いてある。故に松下村塾に於ける諸生の教養は、全く素行先生の精神を精神として行はれたのであつて、その教科書には、『配所殘筆』『中朝事實』等、何れも素行先生の名著が用ゐられてゐる。教育家としての吉田松陰の態度について我々が特に深く感ぜしめられるのは、その書を講じて忠臣孝子が節に殉じ孝を致すの條を取扱

ふ場合には、次第に熱して來て、遂には聲うちふるはせ、双眼から涙を流して其の爲に書物を潤すといふ有様なので、木石ならぬ門人たちも之に共鳴して感激し、自分等も必ず忠臣孝子たらずば止まないと云ふ強い覺悟を持つやうになつたのである。又その反對に古への逆臣が時の天皇を苦め奉る所に講じ到るときには、松陰の相貌が怒に燃えて、皆が裂け、聲が一層高く張り上げられ、所謂の怒髮悉く逆立つ凄じい見暮で、一言一句、力強く講ずるので、青年血氣の門下生等は我知らず烈しい感動を受けて逆臣を憎むの情を起し、若しも當代に其の様な者があれば一刀の下に斬り拂はねば措かないとの決心を抱くに至つたのであるが、此の松陰の態度は、『人を動かさんとするには己れ先づ動かねばならぬ』と云つたソクラテースの言葉を體現したものであつて、他人を燃焼せしめんが爲に先づ自ら燃焼した二十一回猛士の面目の躍如たるものがある。此の様な強い迫力を以て門人を率ゐたからこそ、その教養の時間が短く、又、師たる松陰の年齢が若かつたにも關はらず、門下に俊傑を輩出して、明治維新の大切な時代に、十二分の御奉公をさせる事が出来たのである。而も更に進んで深く考へると、松陰を其處までに仕上げた根本の力は、全く山鹿素行先生の主義、理想であつて、此の意味に於て、前に書き列ねた維新の元勳十名の働きは、素行先生の人格の力・精神の力が、熱血の志士吉田松陰を通して現れたものであると云つても過言ではあるまいと思ふ。

四

第三の乃木大將御夫妻に就いても第一例・第二例と同様の斷定が下されるであらう。世間周知の如く、乃木大將と素行先生とは思想の上で餘程深い關係がある。大將の父君希次氏は素行學の造詣深く、先生に私淑されてゐたのであるが、随つて我が子の乃木大將に對する教養の仕方も頗る嚴格であつて、寒中に水を浴びせて之を激勵したと云ふ話も事實らしい。大將は生來、身體が弱かつたので、武士となることを好まず、一たびは百姓になるつもりで鋤鋤を執つて見たが、武士の子が百姓になる事にはさすがに堪へられなかつたので、終に思ひ返して再び父の烈しい教養の下に身を投じて、武士としての魂を鍛へ上げたのであると云はれてゐる。大將の凜然たる武士的精神は、直接には此の父君の教育感化に負ふ所が多いのであるが、大將の生れられたのは江戸麻布の毛利邸で、此の藩邸は、報讐後に御預となつた赤穂義士中十名の者が切腹した由緒ある所であるから、此の方の感化影響も大なるものがあつたと思はれる。殊に又、父君は熱烈なる赤穂義士崇拜家であつたから、折々、大將を泉岳寺に伴うて、四十七士の墓に詣で、その前で義士の精忠を物語り、又遺品も見られた事であらう。ところが是等の赤穂義士を教養したのは前に述べた通り山鹿素行先生であるから、大將は、二重三重に素行先生の薰化を受けられたわけである。明治四十年春、大將は、徳大寺侍從長を以て先生の事蹟を畏くも明治天皇の叡聞に達し、

同時に其の著書、日記、肖像、武具等をも乙夜の覽に供し奉つたのであるが、寂感斜ならず、間もなく正四位を賜はつたので、關係者一同は非常に感奮し、素行會が主催となつて、東京牛込辨天町の宗參寺で祭典を舉行した。乃木大將はその席上で祭文を讀まれた。試に其の祭文を讀んで見ると、大將の肺肝を吐露したもので、一讀、人を感激せしめる力がある。それには、自分は幼時から師父の教を受けて、素行先生の著書を讀み、心ひそかに其の崇高な風格を追慕して典型と仰いだと云ふ事や、今茲に殘軀聖明に遭遇して、妄に朝眷を荷ふものは、實に先生の遺訓服膺の賜物であると云ふやうな事が諄々と述べられてある。此の文に徴しても、大將と素行先生との間に於ける精神的關係が如何に深いものであつたかが略ぼ想像がつくと思ふ。大將の此の祭文は、反復熟讀して見ると、色々思ひ當る事が多くあるが、殊に意味深く感ぜられるのは「殘軀」の二字である。これは只文章の綾として使はれたのではなくて、大將の眞情の現れであると考えられる。大將は曾て明治十年の役に陣出して、聯隊旗を敵手に奪はれ、その申譯に死なうと決心されたが、遂にその機會なくして、明治三十七八年の役に至つた。此の戦役は我が國運を賭した大事の戦であつたので、此の時こそ大將は一死君恩に報じ奉る機會であると深く覺悟して、幾たびか危地に出入されたが、武運目出度、終に名譽の凱旋となり、その後は明治天皇の深い御思召で、學習院長に任ぜられ、その後半生を華胄の子弟の教育にさしげられる事となつた。「殘軀」の二字

は即ちこの間の心事を語るものではあるまいか。斯の如く考へると、明治終末の大事件たる乃木大將御夫妻自刃の因縁は最も明白であると思ふが、更に一步踏み込んで、大將をしてこゝに至らしめた原因は何處にあつたかと考へて見ると、素行先生の「死節論」に思ひ當るのである。死節論も、やはり『山鹿語類』の臣道篇に出てゐるが、その冒頭には

委身は臣の道なれば、急に臨み節に中ては身を棄て死を輕んずること、是即ち臣の義也。常に死を守つことをつとむるときは、家を忘れ私を顧みざるを以て本とす（臣道二、仕法）。

とある。素行先生の影響を、種々の方面から受けた大將であるが、殊に此の壯烈な死節論が最も強く影響する所があつたのではなからうかと考へる。此の覺悟が平生その心底にあつたればこそ、畏くも御大葬の砌、神靈昇天したまふと承るや、大將はあくれ奉らじと我と我が肉體を滅して靈と化し、明治天皇の御魂の在らせられる魂の世界に馳せ參じて、忠臣の行ひを延長せられたのである。或る人が英國の或所で忠臣藏の話をして聞かせた處、一人の西洋人は、その時の義士たちの俸給は何程であつたかと問うたさうであるが、さう云ふ考への者には、乃木大將自刃の壯烈極まる動機を説き聞かせたとて、恐らく了解は出來まいと思ふ。

乃木夫人も亦、實に典型的の日本女性であられた。文字通りの良妻賢母として、御主人に貞節を盡

し、我が子の兩典を愛育して立派な武士に仕立て上げ、御兩人を出征させられたのは實に天晴れな事であるが、長子勝典氏戦死の報が達した時、大將には今度の戦は非常の場合である、たとひ一人の遺骨が届いても葬式をしないでよ、父子三人の遺骨が悉く届いてから一緒に葬式をせよと命ぜられた、其の悲壯な命令を聞いて、最後までそれを守り通された如き、尋常の婦人には到底出来ない事である。明治時代の結尾を飾る大將自刃の時にも、大將には夫人を供に伴れて行く御考がなかつた事は、遺言書の宛名に「靜子殿」と在るのでわかるが、夫人には、大將の日夕の様子で自然と夫君の覺悟が感知されたので、遂に夫妻相伴うて刃に伏し、夫君が畏くも先帝陛下の御伴として靈界にまでその忠誠を延長せられたやうに、夫人は妻として夫の死に伴ひ、やはり靈界にまで其の貞節を延長されたのである。斯様な事は世界の他の文化國に遂ぞその例を見ない所であつて、實に日本女性のために萬丈の氣を吐いた唯一の場合であると感じられるが、私はこれ亦、素行先生の人格の力・精神の力が、乃木大將を通して、その夫人にも自然に影響を及ぼしたものであると考へたいのである。この事は先生の著、武教小學の女子教育説を見ると明瞭である。

五

以上の如く、日本近世史の上に著しい三個の事件は、何れも素行先生の思想精神と關聯する所甚だ深

いのであるが、斯の如き優れた素行先生の思想は何處から出たか、最後にこの點についてお話して見たらと思ふ。

此の事は先生の手記たる『配所殘筆』を讀むと大體わかる。これは先生の自叙傳であるから、先生の眞骨頭を知る爲には、どうしてもこれを反復熟讀する必要がある。これに據ると、先生は幼少の時から壯年の時まで一意、程朱學を勉強したが、それでは十分に満足が得られないので、それから老莊の學に親んだ。此の老莊二子の虛無恬澹の思想は確に先生の胸を打つたらしく、先生自身「ピンと來た」と云ふ意味の事を書いてゐられる。しかしその高踏的な態度には、何としても同感できないので、更に三たび轉じて佛教を學び、五山の名僧知識をはじめ、隱元禪師などにも教を請うて、悟道の堂奥まで進んだ。それで或る程度までの満足は得られたやうであるが、しかし、未だ十二分とは行かなかつた。即ち佛教に就いては「今日の日用事物の上には更に合點不參候」と書かれてゐる。唯一筋にあの世への往生を説く佛教では、眼前現實の日本國に善處する方法は得られないと感ぜられたのである。そこで先生は四たび轉じて、神道を研究した。これは本朝の道であるから熱心に究めたのであるが、どうもその文獻が足りないのに不満足を感じた。先生は入鹿の亂の時に神道に關する文獻の焼け失せたのが残念であると云ふ事を書いて、熱く歎いてゐられる。斯の如く、内外各般の學術や教説に就いて、どうしても満足が得られ

ないので、先生は衷心、遺憾とせられてゐたのであるが、最後に先生の觸着せられたのは周公孔子の道であつた。これは世に古學と呼ばれたもので、後世的な中間的の夾雜思想を一排して、直ちに周公孔子の原始儒教に迫らうとする態度である。先生は此の研究法に依つて周公孔子の教説の神髓を把握し、茲に始めて十二分の満足を得られたのである。そこで先生は、凡そ聖人の道は孔孟の書を熟讀すれば得心がゆくと斷じて譬を引き、紙を眞直に切るには如何にすれば可いかと云ふに、どれ程切味のよい刃物でも、それを只紙に當てて引いたゞけでは眞直には切れない、それには定規が必要である、定規に従つて切りさへすれば必ず眞直に切れる、ところが予に取つて其の定規の役目をするのは周公孔子の道である、「聖學」の定規・鑄型をよく知つて、之を人生の規矩準繩とするならば、人生の筋道が明白になつて、如何なる難事も自づから解決されるから、誠に心廣く體胖かで、只無爲の境地に人間たるの道を盡すのみであると云ふ意味の事を述べてゐられる。これが先生が多年の間、道を求めて、最後に到達された悟道の極致であつて、先生は周公孔子の道を學ぶ事によつて只其の知識を豊富にせられたのみならず、之を精神の肉とし骨として、偉大なる試練の後に、あの大人格を築き上げられたのである。

此の大人格が、或は赤穂四十七義士に、或は吉田松陰に、或は乃木大將御夫妻に、非常なる感化影響を及ぼしたのは、何の不思議もない事である。今日は日本精神の叫びが各所に聞えて、多くの學者が盛

山鹿素行先生に就いて（深作）

に之を研究してゐるが、眞の日本精神は、素行先生の斯かる側面にも十二分に窺へると思ふ。眞に日本的な人物とは、先生の如き偉傑を指すのであらうと思ふ。——終——

池 邊 鶴

氣高くも御園の池のほとりにて
齊藤 精一

鶴の一と群遊びたはぶる

齊藤 榮吉

大庭の池のほとりにおりたちて

ともよぶ田鶴の聲のどかなり

京都の一夜

佐藤 庸也

鴨川のネオンサインの夜はふけて

まくらに通ふせゝらぎの音